女性職員活躍事例　第7回

広島管内で活躍されている女性職員の皆さんにお話を伺いましたので御紹介します。

今回は‥ 広島刑務所　主任薬剤師（法務技官）　です。

技官の経歴

採用　平成２０年１１月
採用までの経歴
　薬学部薬学科卒業
　総合病院薬剤部勤務
　調剤薬局勤務

Q1 現在の業務内容について教えてください。

現在、薬剤師として勤務しています。薬剤師の主な業務は三つあります。

一つは、医師の処方に基づいて医薬品の調合を行う「調剤」です。毎日、薬局で黙々と（時には雑談あり）調剤業務を行っています。

二つめは、医薬品等の「管理」です。滞りなく医療を行うことができるよう調達も含め、在庫管理及び品質管理業務を行っています。

三つめは、「DI活動」です。「DI」とは、Drag　Informationの略で、簡単に言えば、医薬品に関する情報を管理・提供することです。医薬品を安全にかつ適正に使用するため、医務部スタッフに向けて、情報を提供する業務を、地道に行っています。

Q2 どのような職業をされていましたか。現在の仕事をする上で役に立っている経験等があれば教えてください。

薬剤師免許を取得後、薬剤師一筋35年。薬剤師以外の仕事に携わった経験はありません。振り返ると、一般の病院及び薬局薬剤師として培った11年間の経験と知識だけが、矯正施設の医療が何も分からないまま薬剤師として採用された当時の自分にとって、根拠のない自信と支えになっていたように思います。

Q3 この仕事に就くきっかけについて教えてください。

ハローワークの紹介です。当時、家庭と仕事との両立が可能であり、かつ、病院薬剤師として勤務できる職場を希望しており、主人の強い勧めもありましたので、今から14年前に思い切って矯正医療に飛び込んでみました。

長く矯正医療に関わるようになろうとは、正直思ってもみませんでした。

Q4 これまでこの仕事を続ける中で、特にうれしかったことや達成感を感じたことはありましたか。

「幅広い業務に対応できる薬剤師としての経験と、医薬品の専門家としての知識」に基づいた提案に対して、一定の評価を得られるようになったと実感したとき、小さな達成感を感じました。失敗や間違いは、勿論ありましたし、自分の不甲斐なさに落ち込み、悩んだこともありましたが、地道に実績を積み重ねていくことで、医務部スタッフ等と徐々に信頼関係を構築していくことができたように思います。「薬の専門家」として意見を求められ、職責を全うすることが実感できるようになった現在、（辞めずに）頑張ってきてよかったと心から思います。薬剤師として矯正医療に貢献できることを一つずつ確立していく‥それが仕事に対する自分のやりがいであり、自己満足ではありますが、喜びであると感じています。

Q5 反対に、困難なことや問題はありましたか。また、それをどのように乗り越えてきましたか。

矯正の医療が、時として、処遇面を考慮した対応が必要になることがあり、当初、戸惑いがありました。医務部及び他部署の職員の方に、指導いただきながら、全ては根拠に基づいた処遇であることを、一つずつ理解し、自分の中に落とし込んでいく作業を繰り返し行い、現在に至っています。しかしながら、今も判断に迷う場面があり、学びの日々です。ご指導いただきました強面ではありますが、心優しい職員の皆様に深く感謝しております。

Q6 仕事をする上で、心掛けていることはありますか。

矯正の薬剤師としての心構えは、当然のことですが、判断に迷ったときは、根拠に基づいているかどうかを確認してから行動するよう心がけています。それと、医務部のスタッフをはじめとして、関わりのある周りの職員の方への感謝の気持ちは、常に忘れないように心がけています。

Q7 これまでのキャリアを振り返られていかがでしょうか。

中途採用ですので矯正医療のスタッフとしてのキャリアは、15年弱ではありますが、一般病院の薬剤師では経験することができない矯正医療で頑張ってきた経験は、自慢できる財産の一つと言えます。

広島刑務所　主任薬剤師（法務技官）

Q8 女性が仕事を続ける上で、何が大切だと思われますか。

あくまでも一般論ですが、自分も含めて、女性は「自分だけが頑張っている」等という思考に陥りやすい傾向にあるのかな・・と思われます。其れゆえ、感情的ではなく、自分の周囲、環境、立ち位置を客観的に分析することが大事なのではないかと思います。冷静に自分の立ち位置を認識し、視点を変えることで気付きを得ることがあります。広い視野でみる力を養い、自分なりに最善を尽くすことができる環境を整えていくことも大切だと思い、日々、努力しています。

Q9 どのような職員にこの世界に入ってきてもらいたいですか。

２０１５年、国連で「SDGs」が採択されて以降、働く女性を取り巻く環境及び意識は、大きく変化しています。自分が採用された14年前と比べると、女性職員数は格段に増えました。今後も「女性職員」の環境は大きく変化していくと思われ、いずれは、「女性職員」という概念もなくなるのかもしれません。「女性職員」ではなく、「職員」として仕事に対して真摯に向き合い、自分の置かれた場所で、たくましく未来を切り開いていく「職員」を心から応援しています。